＜大学生のバッグパックなどの携行物を持っている時と持っていない時の足部への影響―浮き趾，外反母趾，足底の接地面積の視点から―＞

研究年度　令和　3　年度
研究期間　令和　3　年度～　令和　4　年度
研究代表者名　大重　育美
共同研究者名　新田　祥子、坂本　仁美
山口　多恵、飛奈　卓郎

Ⅰ．はじめに

本来は、テーマ「幼児期における足趾の運動機能の発達支援に向けた実証的研究」という予定であった。研究設定の理由は、子どもの不慮の事故予防は、従来から母子保健の重要課題として位置づけられている。近年では、運動機会の減少を反映して、子ども自身で転倒を予防できる姿勢保持機能の脆弱化も問題となっている。このように転倒を予防できるためには、姿勢を支える足部の状況は重要なポイントとなる。そこで、本研究の目的は、①幼児を対象に足底の状況、片足立ちによるバランス機能・足趾による運動機能と家庭での生活スタイルとの関連を明らかにすること、②幼児に向けた足趾力を高める運動による介入の効果を評価することであった。

しかし、令和 3 年度は幼児を対象に令和 4 年 1 月 24 日から 2 月 4 日までの期間で調査予定としていたが、COVID-19 の第 6 波の影響を受けて延期となった。

そこで、令和 3 年 10 月にプレテストも兼ねて、大学生を対象に調査をしたので報告する。
大学生の健康課題として、女子では他の年代に比して運動習慣がないこと、歩数が少ないことから、活動量低下に伴う姿勢の安定性低下が危惧された。また大学生は、普段からバックパックなどの荷重のかかる鞄を保持することで立位バランスが不安定になりやすく、それは足部の状況が影響しやすいと考えられた。これらの問題提議から、研究デザインは横断的観察研究を用いて実施した。

Ⅱ．研究内容

質問紙調査では、対象者の年齢、性別、身長、体重、通学時間、アルバイトの有無・時間、足のトラブル等、普段の履物、鞄の種類（バックパック，トートバッグなど)、鞄の重量について尋ねた。フットルック®による足型を印刷後に確認する項目は，浮き足趾の本数，母趾角度と小趾角度，接地面積（%）など 4 項目を測定した。

Ⅲ．研究成果

大学生を対象とした携行物の保持時と非保持時による足部状況の変化は、右足にのみに保持している時よりも保持していない時の方が浮き趾が多い傾向であったが、母趾角度、接地面積には変化はみられなかった。さらに、足底の接地面積の 50～60%台の対象者は、浮き趾が多い傾向がみられるが、外反母趾などの障害とは関連がないという特徴が明らかとなった反面、接地面積が 70%以上では外反母趾や扁平足などの足部の異常を持っている可能性も示唆された。

Ⅳ．おわりに

本研究の対象者は、全く浮き趾なしが右足で 8.2%、左足で 7.1%と、平均 20 歳代の健常女性と比較しても浮き趾が多い集団であることから、姿勢が不安定であることが推察された。今後、携行物の持ち方など啓発教育が必要となる。本研究は、令和 3 年度長崎県立大学看護栄養学部紀要 第 20 巻に掲載予定である。